



## 学生相談室だより

第16号

2008. 10. 10 発行

学生相談室のご案内  
開室曜日：月曜日～金曜日  
開室時間：12:00～16:00  
場 所：S棟5階

秋風が肌に気持ちいい季節になりました。スポーツ、読書、芸術・・・長崎くんち、純心祭・・・楽しみが多い季節です。学生相談室カウンセラーからメッセージが届きました。新しい何かを感じることができるといいですね。

### ～ カウンセラーからひとこと ～

#### 夏の事件に思う

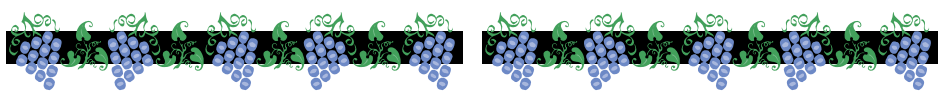
浅香 佐輝子 (木曜日担当)

この夏は、とても暑かったですね。皆さんの体調は、如何でしょうか、お変わりありませんか？

ここ数年、カンカン照りが続いていたかと思うと、突然、雷鳴が轟き、ゲリラ豪雨が地を襲い、人々の生活を脅かすようになってきました。被害のニュースを耳にするたびに、地球は大丈夫なのだろうか、環境破壊に対するしっぺ返しかな・・・とったりしています。天候のことに何だか似ているなど思ったのが、この夏、立て続けに起こった、若い人達による事件です。いろいろな背景があったのですが、少しずつ知らない間に自然な感情を出すことができなくなってしまい、積もりに積もった様々な感情が、ある日、突然に爆発してしまったように思えてなりません。

自然な感情といいますが、喜怒哀楽のポジティブな方の「喜」と「楽」は、人前で出しやすいものですが、ネガティブな方の「怒」と「哀」は、なかなか人前では出しにくい、あるいは、受け入れてもらいにくいと思いませんか？ ある程度、自分に自信がついてくると、例えば、理不尽な扱いを受けた時、「このぐらいの怒り（悲しみ）は、出してもいいんじゃないか？」と思えてきます。しかし、自信がないと、「こんなことを言うと嫌われないだろうか？」という気持ちが先にたってしまう、周りの人に合わせてしまうことが増えるかもしれません。これを繰り返すうちに、言えなかった気持ちを自分の中に溜め込んでいってしまいます。まるで鍾乳洞に入った水が、長い年月をかけて沈殿、堆積をして石筍となっていくように・・・

いったん石筍のようになってしまうと、それを溶かすには長い長い時間が必要になってしまいます。そうしないためにも、気持ちをこまかして遣り過ごすのではなく、正当なやり方で相手に伝える練習をしましょう。相手と対等に感情を伝え合うことができるようになると、細かいことは大して気にならず、穏やかに生きていけるようになります。一人で考えていくには、なかなか難しいこともありますので、そんな時は、どうぞ相談室のドアを叩いてみてください。



#### 人類はみんな兄弟

川浪 由喜子 (火・水・金曜日担当)

お盆に、小学生の姪がこんなことを聞いてきました。「Aちゃん（自分の母方のいとこ）とお父さんはなんで血がつながってないの？」

図を描きながら説明して、それなりに納得したようですが、「でもさ、ずっとさかのぼっていけば、つながるんじゃないの？」そう言われて、私は、はたと考え込んでしまいました。

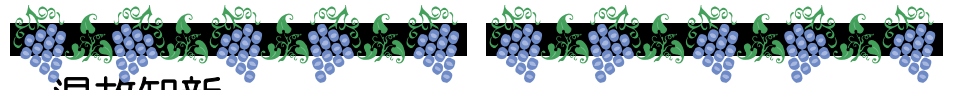
親は2人、祖父は4人、その親は8人、その親は16人・・・10代（約200年）さかのぼれば1024人、20代（400年）さかのぼれば約100万人、30代（600年）さかのぼれば約10億人になります。しかし、今から400年前には日本の人口は、3000万人以下、世界の人口でも10億人もいません。ということは、姪が言うように、どこかでお互いの親はつながってきますし、その親と皆さんの親もさかのぼっていけばいつか必ず重なるのです。つまり私たち人類は、みんな親戚であり兄弟なのです。これはトリックでもマジックでもなく、よく考えれば誰でもわかる事実であり、

とても大切なことです。きっと、小学生の姪は、どこかでこの事をわかっていたのでしょうか。子どもと接していると、こんなふうに私の方が教えられることも珍しくありません。自分以外、みんな“師”という言葉がありますが、本当にそうですね。

家族は、本来助け合い、分かち合っていくものだと思います。今、世界は、資源を奪い合い、格差はどんどん激しくなっています。でも、この「人類はみんな兄弟」という事実を思い出し、実感できれば、世界は変わっていくのではないのでしょうか。相田みつをさんの言葉にもありましたよね。

「うばい合えば足らぬ、わけ合えばあまる。うばい合えば憎しみ、わけ合えば安らぎ。」（みつをさんのあの字体だからこそ伝わるものがあると思います。そこが、伝わらないのは残念ですが・・・）

そういう世界になるよう、自分ができることから始めたいと思います。



#### 温故知新

瀬頭 りつ子 (月曜日担当)

いよいよ後期がスタートしましたが、みなさん、いかがお過ごしですか？ 約2ヶ月の長い夏休みであった為、学校生活が少ししんどく感じられる人もいるかもしれませんし、逆に夏休み中にたくさんのエネルギーを蓄え、元気いっぱい後期を迎えた人もいるかもしれませんね。

この夏の私はといいますと、県外へ研修に行ったり家族旅行に出かけたりと、いろんなことを体験したのですが、宮崎駿監督の最新映画『崖の上のポニョ』を見に行ったことも、大きな体験の1つとして挙げられます。

この映画は、アンデルセンの『人魚姫』をモデルとしたもので、さかなの子ポニョと5歳の子宗介との交流を中心に描かれた映画です。詳しいストーリーは、この映画をまだ見ておらず、これから見ようとしている人たちの為に、ここでは記述しませんが、この映画の特徴の1つとして、CGによる表現を用いておらず、すべて手描きでアニメーションを表現していることがあります。

もちろんCGも、よりリアリティのある質の高い表現を行う為に必要なものであり、素晴らしい方法なのですが、私は今回この映画を見て、CGの基盤・ルーツであり、リアリティを含め様々な印象を鑑賞者に与える『手描きによる表現』というものを感したような気がしました。

『温故知新』という熟語があります。『昔のことをよく研究し、それを参考に今、突き当たっている問題や新しいことについて考える』という意味です。『崖の上のポニョ』を見た時、手描きという『昔からある表現の方法』を用いて、最新映画という『新しいもの』に取り組んでいる印象が強く、そこから私の頭の中には『温故知新』という熟語が思い浮かびました。『温故知新』は言い方を変えて『ふるきを温めて新しきを知る』と言われることもありますが、良かった時も悪かった時も、その全てを含んだ過去の自分や、自分の周囲にある昔のものといった『ふるき』を温めながら、これからの自分の発展・成長という『新しき』を考えていくことも、何かの役に立つかもしれませんね。

